

誌 上 キ ャ ラ リ ー ト ー ク

フランス・プリウレ美術館蔵

Maurice Denis

モーリス・ドニ展 ― 愛の預言者

会期 9月12日(金) ▶ 10月19日(日)

19世紀半ば以降、外の世界、目に見える世界の真実を追求していた写実主義や印象派の時代に忘れられがちだった内面の世界、すなわち思想や哲学を、文学や美術の中に表現しようとする芸術運動が起こります。この運動は世紀末には象徴主義という大きな幹となり色とりどりの幻想の花を咲かせたのです。モーリス・ドニ(1870-1943)はゴーギャンの影響を受けて、ナビ派(ナビはヘブライ語で預言者の意味)を結成し、曲線模様や色彩のもつ力によって内面の心情を表現しようとしました。理論家でもあるドニ20歳の時の言葉「絵画とは一定の秩序のもとに配された色彩によって覆われた平らな面である。」は彼の画業以上に有名です。そしてドニ独自の特色であるカトリシズム。数多く描かれた愛妻マルトや子供達の姿、キリスト教徒としての日常経験は、彼のカトリック的世界観の反映です。また、建物の室内装飾や本の挿絵、ポスター、舞台装飾など、美術全般に渡る活動の多様さにも注目すべきでしょう。さて、あなたは本展の全作品の中に何人のマルトを見つけることができるでしょうか?

[合田笑子]



▲《マルトの肖像》1898年

©Musée Départemental Maurice Denis "Le prieuré", Saint-Germain-en-Laye



森へいらっしやい!

Katsura Funakoshi

舟越 桂展 ― 森から来たささやき

会期 10月31日(金) ▶ 12月7日(日)

1980年代はじめから楠(くすのき)を素材に人物像を作りつけ、その独特の雰囲気をもった作風から国内外の多くのファンを魅了してやまない美術家、舟越桂。昨年、彼のアトリエに他の巡回会場の学芸員と共にお邪魔する機会がありました。

舟越さんとお会いするのはこの時が始めてでしたが、飾らない気さくな印象の方です。こじんまりとしたアトリエの中には、制作中の作品、過去の作品、道具類が置かれ、壁にはデッサンやアイデアを書き留めたメモがたくさん貼られています。また床には楠(くすのき)の削りクズが散らばっていて、甘い芳醇な香りを漂わせています。

作者は今展に「森から来たささやき」という副題をつけましたが、私にはこの舟越のアトリエがまさに「森」のように感じられました。創造主=舟越桂の手によって、毎日木々が作品へと成長していく舟越桂の森。森の中で、来訪者の私たちは創造の神秘に触れ、贅沢な時間を味わうことができました。

森といえば、空間の中にニョキ、ニョキと木が生えているかのように作品が設置された舟越桂展の展示会場も、まるで森のようです。森を散策する来訪者は、そこに響きあう無数のささやきに耳を澄まして、お気に入りの木=作品とのひそやかな対話を繰り返すことになるでしょう。秋のひととき、森へいらっしやい!

[高松市美術館学芸員 牧野裕二]

舟越桂講演会

日時: 11月1日(土) 午後2時30分~4時 場所: 美術館1階講堂 料金: 入場無料
定員: 先着200名 当日昼12時より1階受付にて整理券配布

突撃 アートの晩ごはん 5

今回のメニューは甘くておいしいもの!!
でも、これもアート?! 現代美術ってなんだか、
おもしろい。

美術館でチョコレートの香り?!
においに誘われてその部屋(展示室)に
いってみると、そこには800kgもの
溶けたチョコレートが噴水となっ
てあふれ出ています。イギリス人女性ア
ーティストベレンチャドウィック(1953~
1996)の《カカオ》(1994年)
という作品に接すると、視覚だけでは
なく嗅覚さらには五感すべてを使って
体験してみたいくなります。

チョコレートの泉がマグマのように
ポコポコ音をたてて湧き上がっている
様子を目の前にして、色々と
私の頭に浮かんでき
ました。

「本物のチョコレート?」
「熱い? 触ってみたい!!」
「なめてみたい!!」
「でも、
なんだか汚そう。色も
なんだか...」
「この香
りだけでお腹いっぱい!!」
タイトルはスペイン語で
《CACA》ですが、
これを英語で発音する
と「カカ」と聞こえます。
多くの西洋言語圏で
「カカ」といえば大便を
あらわす幼児語です。

この作品は、私た
ちの旺盛な食欲と、
それに対する後ろ
めたさや嫌悪感を
思い起こさせるこ
とを計算して作られ
ています。幼い頃、大
好きなケーキやチョコ
レートを「一杯分くら
い食べてみたいと思っ
たことのある方はいら
っしゃいませんか?」
チョコは、そういう人



間の素朴な欲望を、この作品で私た
ちに身を持って体験させてくれます。
さらには、現代社会における人間の
どまるところを知らない消費欲や、あ
らゆる欲望に対する罪の意識を感じ
ることができるかもしれません。
《カカオ》は、私がこの展示をみた
水戸芸術館現代美術ギャラリーでの
来館者による人気投票でNo.1に
選ばれていることから、大変インパ
クトの強い作品です。
【小嶋麻紀】

主な活動

2003年

- 2・1 ★現メンバーとの顔合わせ、美術館の概要／
前田昭徳(高松市美術館美術課長) 他
- 2・22 ★西アフリカの美術展ギャラリートーク参加／
山本英之(高松市美術館学芸員)、美術館
コレクションについて／住谷晃一郎(高松市
美術館美術課長補佐)
- 3・1 ★第5期常設展ギャラリートーク参加、常設展
ギャラリートークの準備、鉄腕アトムの軌跡展
レクチャー／牧野裕二(高松市美術館学芸員)
- 3・15 ★常設展でのギャラリートーク実践、批評／
牧野裕二(高松市美術館学芸員)
- 4・1 しびのーと7号発行
- 4・7~5・11 「鉄腕アトムの軌跡展」ギャラリートーク
- 4・19 ★美術館教育について／毛利直子(高松市
美術館学芸員)
- 5・10 ★ベスト・コレクション展 人間のイメージレク
チャー／川西弘一(高松市美術館学芸員)
- 5・24 ★モダン・アートとポスト・モダン・アート／
牧野裕二(高松市美術館学芸員)
- 6・6~6・22 「ベスト・コレクション展—人間のイメージ」
ギャラリートーク
- 6・21 ★ホイッスラーのジャポニスム／遠山景子
(高松市美術館嘱託)
- 7・15 後藤朝子(造形作家、高松市美術館子
どものアトリエ講師)氏アトリエ訪問
- 7・25~8・31 「ヘンリー・ムーア展」ギャラリートーク
- 9・12~10・19 「モリス・ドニ展」ギャラリートーク

★は美術館ボランティア養成講座

■ ボランティア養成講座を受講して [2・1~6・21]

市民と美術館とのかけ橋として1999年
より活動を開始しているciviですが、負けず
劣らずアートが大好きな新メンバー10名が
ボランティア活動への期待と不安を胸に、
5ヶ月間全8回にわたるボランティア養成
講座を受講しました。養成講座では、高松

市美術館の概要説明に始まり普段立ち
入ることができない施設(収蔵庫や搬入
スペース)の見学、また、美術史について
自分の知識の浅さを痛感(!)しつつ学び、
美術館教育については様々な視点から
作品を鑑賞する楽しさを学びました。まだ

まだ発展途上な私達ですが、第1期メンバ
ーの方々に支えられつつ作家の興味深い
エピソードを交えたギャラリートークで美術
館にいられた方々に作品を楽しんでいた
だき、作品との出会いをより印象深いもの
にできればと考えております。【木村真由美】

■ 後藤朝子さんの工房を訪ねて [7・15]

屋島に近い高松町の高台にある
現代工芸家、後藤朝子さんの工房を
お尋ねしました。

後藤さんは京人形の伝統的手法を
用いて、現代的な人体彫刻の創造を
探求され、パリや日本各地で展覧会を
開催してこられました。2003年上半期
には、高松市美術館「こどものアトリエ」
の講師も勤めていただきました。

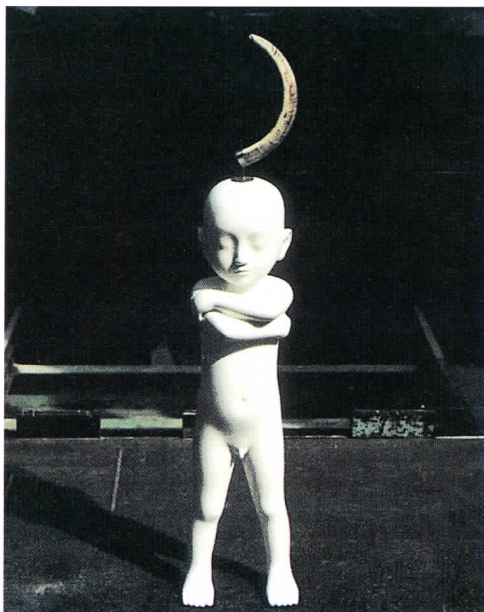
「まずは作品を紹介しましょう」と
個展時のビデオを見ながらお話をお聞
きました。後藤さんの展覧会場では、空
間構成を大切に考えて作品の展示に
は細かな心配りがされています。例えば、
訪れた人が歩くことによって揺れ動く空
気の流れを利用したり、照明器具も納
得のいくものをご自身で用意されるとい
うお話には感動しました。

アトリエでは新たに成人女性をイメ
ージして桐の木芯に粘土で人体が形作ら
れているところでした。やがてこれは完
成に近づけば6ミリ位の厚さになるまで
何十回も胡粉(貝殻の粉)を塗り重ねて
なめらかな肌合いを出すということや、

木彫りの人体は木組
みだけによってそれ
ぞれの部分が固定さ
れるので、二百年以
上も保存に耐えるとい
話にも驚かされました。

この写真の白い童
子は深い悲しみをた
たえて、どこか寂しげ
ですが、頭に頂く三日
月は古来より再生の
シンボルとされた月の
話を想起させ、未来
への希望が感じられ
ます。

今回の訪問では、
何ものかを生み出す
ためには深い思いと
情熱を注ぎ込まなけ
ればならないことを知
りました。後藤さんの
今後の活躍を期待
しつつ工房を後にし
ました。【河野恵美子】



■ 初ギャラリートークを終えて

8月10日、ギャラリートークデビューの日。
快晴。数年来憧れていたciviの一員とな
って待ち待ったこの日でしたが、美術鑑
賞が大・大・大好きな私でも準備は思っ
た以上に大変でした。恥ずかしいこと
に「ヘンリー・ムーア」という彫刻家の
名前に聞いたのは生れて始めてだった
のです。そして、これまた生れて始めて、
図録を隅から隅まで実に真剣に読みま
した。それも何度も。資料にも赤線が
一杯。とても疲れる作業でしたが、もう嫌!

と思い始めた頃、乱雑だった頭の中が
不思議とまとまって来ますし、作品を
観る目も霧が晴れたよう。トークの原稿
を推敲し、通勤の車の中で練習して当日
を迎えました。控え室で「まず肩の力を
抜きなさい。そして人と競う気持ちを捨
てなさい。」とciviの先輩が残してくれた
メモを見た時、気負いも緊張もどこかに
飛んでいきました。その為か、お客さん
も私の問いかけに気軽に答えてくれるし、
感心したように頷いてくれるし、今の私

としては大満足の
楽しいトークになり
ました。40分間も
立ったままで私の
話を最後まで聞い
てくれた方々に
感謝の気持ちで
一杯です。

【合田笑子】



高松市美術館コレクション

篠原有司男 《モーターサイクル ツイスト》

1973年/カイトボード ポリエステル樹脂 108×57×59 (高) cm 高松市美術館蔵

オートバイといえば「ボンダカワサキ」。アメリカでも日本製のオートバイが席巻している中、このバイクは1973年型のメイディンアメリカです。作者は(牛ぎゅう)ちゃんこと篠原有司男のほうしお。モヒカン刈りの頭でジャズバンドをバックに体当たりでアクションペインティングを行なったり、1960年には赤瀬川原平、荒川修作らと前衛美術集団ネオ・ダイズム・オルガナイザーズを結成、その後ボクシングペインティングを発売。

このように、彼の作品は独自のパフォーマンスから生み出されます。

1969年、ロックフェラー三世基金をうけて渡米。当時、お金が全然無くて絵の具屋さんに行っても何も買えず、手ぶらで帰つてくると家の前にダンボールの箱が折り畳んで山積みになって捨ててありました。それを持って帰り、細切れにして作り始めたのが、オートバイのリアルサイクル彫刻でした。オートバイ彫刻は大小あわせて100台近く制作されていて、その中には手に朱の筆を持った弘法大師空海様を乗せた「空海・モーターサイクル」(1993年制作)もあります。



篠原の作ったオートバイにはアルミのエンジンが搭載されていません。しかし作品には、太陽が激しく照りつける中でも、吹きまくる寒風の中でも、働き続けるニューヨークー達のパワーが感じられ、オートバイはまるで生き物のようで、今にも走り出しそうです。

「早く、美しく、そしてリズムカルであれ」が篠原の制作時のモットー。その言葉どおり、牛ちゃんは世界のボンダよりも速く、モーターサイクルを生産し続けています。

〔榊原正〕

美術館日記



2003年7月29日 「ヘンリー・ムーア展」手による鑑賞

ヘンリー・ムーア展会期中、視覚障害者の方を対象に、手による鑑賞を実施しました。昨年になるに従い抽象化されていく作品を、「わかりにくい!」を連発しながらも、興味深そうに熱心に鑑賞されていました。



2003年8月2日 シヴィ定期ミーティング

月に一度行っているシヴィのミーティングにて。シヴィの集合写真はほとんどないので貴重な一枚(?)。実際には写っていない人を含めるといます(計30人)。



2003年8月24日 博物館実習

正体は、箱の中に作り出したミニ美術館です。学芸員資格取得を目指す大学生対象に実施された博物館実習にて課題として制作してもらいました。きちんとパンフレットも作成し、最後にはギャラリートークしてもらいました。

〔高松市美術館学芸員 牧野裕二〕

前回に続き、2度目のウェネツィア・ビエンナーレ見物。1日しか時間が無いので急ぎ足でまわる。まずはサンマルコ広場に面した歴史的建造物の内部で開催された総合ディレクター・フランチェスコ・ボナミによる企画展「絵画 ラウレンティウス・バークからムラカミまで 1964-2003」。(タイトルどおり、ラウレンティウス・バークからムラカミまで戦後現代美術の代表的な作家による絵画が教科書的にほぼ時代ごとに並べられている。個々の作品は粒ぞろいだが、小さなサイズが多く(あんなに小さなキッパがあるとは知らなかった)、全体として訴えかけてくるものに乏しかった。それに、冒頭に置かれたムラカミのウィットンのコラポレーション・アニメは「絵画」ではないのか!)

次に水上バスで少し行ったところにある、国別のパヴィリオンが立ち並ぶジナルダーの会場とかつて造船所であった広大な施設内で8つの企画展が開催されているアルセナレの会場へ様々な手法や傾向の作品が混在するが、目に付くのはポリティカル・政治的な内容を持った作品と、テクノロジーを駆使したマルチメディア作品。前者の最たる例は、かつて貿易によって築かれた二つの繁栄が黒人労働力によって支えられていたという事実を軸に、黒いシャンデリアをウェネツィア・カンパニョーラで制作するなど、あの手の手で、黒人問題について観客に思考を促すレッド・ウィルソン・アメリカ館の作品だが、図式的に過ぎ、畳み掛けられるようなそのアプローチにはやうんざりさせられた。一方パヴィリオン入口を積み上げたフロックで封鎖し、スベインのバスポートを持った観客のみが裏口から入ることのできるサンチェ・ニエラ・スベイン館の作品は、事前に情報を得ないで理解できないという問題はあっても、の、国どうしの対決という旧来型のビエン



▲オーストラリア館に掲げられたP・ピッチニーニの作品写真

ナーレの構造や、さらには見世物小屋のなりがちなパヴィリオン展示内容への異議申し立てとなっている点が面白かった。マルメディア型では、52ある海の写真パネルを引き出すとそれぞれの海の実際の音が鳴り響くロニ・アイランド館の作品が記憶に残った。ポリティカルな内容を扱ったマルメディア作品というのもあり、例えばチェン・ヤン・ヤン・ヤン・ヤンの作品では、上海の高層ビルが彼方から突っ込んでくる飛行機をひいて、衝突から回避する様子がCGと実写の合成で表現される。思わず見入ってしまうが、連想させるモノがモノだけに、ブラックジョークとして受け取ってしまうのかたまりてしまう作品ではある。またマイケル・ロウナー(イスラエル館)の作品では、暗闇の中、スクリーン上でおぼたたい数の黒いシルエットの人間がたえず動きながら、列や群れを作ったり、辺りに散らばったり、しばらく進むと人間たちは机に並べられたシャ

ヴェネツィア・ビエンナーレを訪れて

〔高松市美術館学芸員 牧野裕二〕

会期は2003年6月15日〜11月2日
公式ホームページ <http://www.labiennale.org>

知ったかぶり？

みんなが利用しやすい施設なんだね！

civiと一緒には美術館を探索してみませんか？
今回は、皆様を3つの貸し出し施設へご案内しましょう。

美術館といえは展示会を見に行くところというイメージがありますが、みなさんが芸術活動に利用していただくための施設

もういろいろと備わっており、有料ですが比較的安価な貸出料で利用することができます。

まず、南入口より入ると右手



▲市民ギャラリー

▲講堂

また、1階北側には、2000人収容可能で、16ミリフィルムやビデオプロジェクトなどAVの設備も充実した講堂があり、講演会、映画上映会、コンサート等幅広い用途に利用されています。土日にはピアノ教室の発表会が多く開かれ、綺麗なドレスを着た子どもたちのしゃがみ声がエントランスにこだましています。

さらに3階には洋画・日本画・版画のための設備が整った4つの講座室があり、美術作品の創作活動を行うことができます。講座室1は主に版画制作のための部屋で、大きなエッチング用のプレス機が置かれています。講座室



▲講座室

美術館 8

美術館 2003年度のラインナップ

【特別展】

モーリス・ドニ展-愛の預言者

9.12(金)～10.19(日)

舟越 桂 展

10.31(金)～12.7(日)

高松市美術館開館15周年記念特別展 玉楮象谷展

2.27(金)～3.28(日)

【常設展】

現代美術と工芸

第4期 10.25(土)～11.2(月・祝)

第5期 1.17(土)～3.28(日)

【アートで遊ぼう！(作品を「じっくり見る」ための鑑賞プログラム)】

- 対象: 小学3～6年生
- 定員: 各15名(申込制・先着順)
- 時間: 午前9時30分～11時
- 開催日・内容: 後期3回通し

10・4(土)	「100年前にドニさんが考えたことって?」(仮称)
11・15(土)	「物語をつくらう!」(仮称)
2・28(土)	「きみも象谷さんになろう!」(仮称)

*参加費無料、日時・内容は変更する場合ありその他、冬休みにワークショップを開催予定



▲モーリス・ドニ
(猫というランソウ夫人)
1892年頃
©Musée Départemental
Maurice Denis 'Le prieuré',
Saint-Germain-en-Laye



▶舟越桂「砂と街と」
1986年 個人蔵
撮影:落合高仁

私達と鑑賞を一緒にしませんか?

美術館ボランティア「civi(シヴィ)」による
ギャラリートークは特別
展会期中の毎日曜日
および祝日の午前11時～
午後2時～1日2回、2階
展示室にて行います。

作品や作家などの知られざるエピソードが聞けるかも?

編・集・後・記

- 原稿の締め切りに追われプチ作家気分を味わいました(笑)もうすぐ芸術の秋、どこの美術館に行こうかな... [木村真由美]
- GTもしのびのりと編集も始めたので体験でしたが、何事も楽しめば案外できることがわかりました。 [合田笑子]
- アトリエにお邪魔した後藤朝子さんのリビングのテーブルの上に大きな水晶の原石が置かれています。ヒマラヤのトレッキングで探し出して来られたそうです。ちなみに美術大学時代はワンダーフォーゲル部で活躍しておられたそうです。 [河野恵美子]
- 古代メキシコでは「神の食べ物」として、紀元前2000年頃からカカオ豆をすりつぶしたものが飲まれていました。1519年スペイン人によってヨーロッパに広められ、さらに300年後には飲みやすいココアが誕生。1876年にスイスでミルクチョコレートが生まれると、瞬時に世界中に広がりました。日本で全国的にチョコレートが知れ渡ったのは、大正に入ってからのことだそうです。 [小嶋麻紀]
- 今、地球全体でリサイクル運動が盛んですが、30年前からパーあふれるリサイクル彫刻制作している篠原有司男氏。次のライダーには平賀源内さんを推挙したいです。 [南原信子]
- アシスタントで参加しながらも、いつもどおり(?)ちゃっかり作品作りもしてしまっただ淵力さんのワークショップ(8・20・24)。FRP、エポキシパテ、シリコン...等ケミカル素材のオンパレード。子どもたちはは理科のいい勉強になったかも。久しぶりにプラモ魂を呼び覚まされました。 [高松市美術館学芸員 牧野裕二]
- モーリス・ドニ展、何とかオープンに間に合いました。展示すること4日。フランスから修復家の方が来られたので、修復現場を目の当たりにし、感激です。作品に対して真摯な彼女の仕事ぶりに、敬意を表したいと思います。 [高松市美術館学芸員 毛利直子]

発行:高松市美術館
編集:civi デザイン:Y&Kデザイン 坂田京子